

(2) 松本市真光寺遺跡で検出した石列の検討

酒井実姫

1 はじめに

真光寺遺跡は松本市波田に所在し、梓川右岸に形成された河岸段丘上に立地する遺跡である。松本波田道路改築工事に伴い、長野県埋蔵文化財センターが令和3年度から発掘調査を実施している。

本遺跡内には、1557（弘治3）年に再興されたと伝わる真光寺が所在し、遺跡の東方には、7世紀後半以降の築造と推定される安塚古墳群と秋葉原古墳群が分布する。

これまでの調査では、古墳時代終末期の古墳や中世の火葬施設跡、土坑墓群などがみつかっているが、本年度の調査で新たにL字状にのびる溝跡と、溝跡の内側でこれに並列する石列がみつかった（図1）。また、この石列は、圃場整備などに

より上部が削平され部分的にしか残っていないが、埋土の状況などから中世以降に構築されたことを想定している。本稿では、この石列に着目して本遺跡における石列の性格について考察し、さらにその上部の様相についても検討していきたい。

2 真光寺遺跡の石列

(1) 検出の状況

石列は、本遺跡内に所在する現在の真光寺の北側、地表面からおよそ0.6mの地点においてL字状に延びる溝跡に沿う状態で検出した。

石列の上端幅は、場所により異なるが1.5~1.8mで上端から下端までの高さは0.4mである。石列は現真光寺側の一角でみつかっており、その全



図1 真光寺遺跡 空撮



図2 石列の検出状況



図4 並べられた礫



図3 石列の断面

長はおよそ6mである。これより北側では検出できなかったが、溝跡の底面で大型の礫がみついているため、溝跡と並行して北側へと続くと考えられる（図2・6・8）。

石列は外側に2列大きな石を平行に並べ、内側に小さな礫が充填されていた。石列の2列に並べられた大きな礫は、直径およそ40cmのものがほとんどであり、特に大きい礫は直径60cmで厚さは25～30cmにもなる。かなりの重さとなるが、大人1人程度でも持ち上がる大きさである。一方、その間に込められた小さな礫は、主に10cm前後で、角が丸い亜円礫であるものが多い。大・小礫ともに石材は安山岩や花崗岩等で、当遺跡から600m圏内に流れる梓川等の河川から容易に採取できるものと考えられる。

（2）構造

ここでは、石列の構築について概説する。土層

の様子から考えられるのは、まず、中世以降において地山に整地をするための盛り土をし、その後に溝跡や石列などをはじめとする、遺構を造り上げた可能性である（図3）。

石列は土石混合の中世以降に形成されたと考えられる整地層の直上で形成されており、この整地層にはわずかに硬い面はあるものの、両刃で土層断面を削るとボロボロと崩れ落ちてしまう。叩き固められた様子を確認することはできなかった。

また、2列で平行に並べられた大きな礫は一段のみ残存しており、この礫を除いた面に、溝跡や杭などの痕跡は見当たらず、十分な固定がされていない（図4）。礫の間に詰められた小礫は、2～3個程度重なって敷き詰められていた。礫を除くと中世以降に形成された整地層に、礫の形状が残っている（図5）。礫の重さによって沈下したように見えることから、石列の上部にはある程度の高さのある構築物の存在が推測され、その重さを礫が受けたことによって圧痕が生じた可能性が考えられよう。このことから、本遺跡の石列は溝跡に沿って造られた土壘などの下部構造の可能性を指摘したい。

3 類似事例

本遺跡の石列には先述したように、2列で平行に並べられた大きな礫を配することと、その間に小礫が込められているという特徴がある。

石列と共に通する類例として新府城跡の本丸跡からみつかった石積（報告書では「石築地」と呼



図5 磯を取り除いた状況

称。以下、この呼称を使用)を挙げ、その構造について比較、検討していく。

新府城跡は山梨県韮崎市に所在する。天正9(1581)年に武田勝頼によって築城され、翌天正10(1582)年に廃城となったとされている(山下ほか2017)。

石築地は、土塁と建物をつなぐ通路としての役割があったと想定されており、石築地の石は両面とも平らで、大きな面を外側へむけて設置されている。さらにその内部には0.1m前後の石が多数、裏込めされていた(図7・山下ほか2002)。

以上に挙げた新府城跡の石築地と本遺跡の石列の構造は、2列で平行に並べられた大きな礫を配



図6 北東より撮影

することと、その間に小礫が込められているという、石材利用の特徴を同様に持っていることから、印象は異なるもののその構造はおおよそ共通するものと考えられる。さらにはどちらの遺構も近世の城郭の石垣とは異なり、平行に2列で並べられた石列は、どちらか一列の片面だけを見せようと意識して造られたわけではないことを推定している。

類似する造りをもつ両遺構により、中世以降の城郭・集落において、石を集積し構築する遺構があつた可能性を指摘できるのではないかと考えている。

4 まとめ

ここまで本遺跡でみつかった、石列の発掘調査状況を整理し、新府城跡の遺構と比較してきた。

結果として、本遺跡の石列は土塁のような遺構の基礎としての役割を持っていたのではないだろうかと考えている。また、それと並行する溝跡は

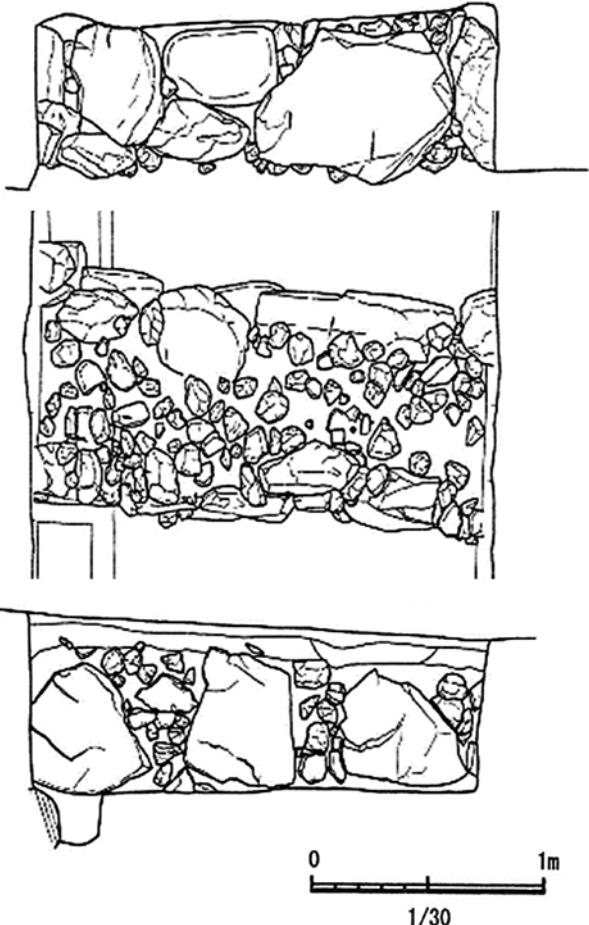


図7 石築地平・断面図

居住域を囲う堀跡であろうか。溝跡が石列とおそらく同時期に形成されたと考えられること、その溝跡に沿うように石列が存在することは、堀と土塁の構築と類似する。それも石列が土塁の基礎と考える根拠の一つであるが、さらに中世以降の整地層に礫がその形状の圧痕を残している点は注目すべきであろう。かなり圧力がかかるような、高さのある構造物が構築されていたと推定している。

一方で、礫の下部にはそれを支えるための構造物や遺物が確認できなかった。本遺跡の石列では、基底部に横木などを設置せず、石を積み上げるだけの構造であったのだろうか。

また、大きな礫が平行に並べられた間に小礫が裏込めとして込められるという石の構造は、類例の新府城跡でみつかっている石築地と共通する要素として重要なものだろうと考える。一方で松本地域において、本遺跡の石列と同じ構造を示す中世以降に構築された例は見つけることができなか

ったため、さらなる類例調査が必要であろう。

まだまだ不明点は多いため、他の用途をもつ遺構であることも考えられるが、本年度の発掘調査により、溝跡に囲まれていた空間があったこと、そこには少なくとも一部において、土塁のような遺構が存在していたことが今後の本遺跡における土地利用を検討していく上で重要であると考える。本遺跡の調査は来年度も継続して行う予定である。遺跡内にはどんな構築物があったのか、松本地域においてどんな存在であったのかについて、今後も検討していきたい。

参考・引用文献

- 伊藤蔵之介ほか 2020 『長野県松本市殿村遺跡（第1・9次・総括）・虚空藏山城跡岩屋社周辺測量調査報告書』
松本市教育委員会
山下孝司ほか 2002 『史跡 新府城跡—環境整備に伴う発掘調査報告書IV—』 荘崎市教育委員会
山下孝司ほか 2017 『史跡 新府城跡—環境整備に伴う発掘調査報告書V—』 荘崎市教育委員会



図8 石列 南西より撮影